

孤独感の構造, 集合的同一性, 人格的同一性および本当の自己の所在

——個体内過程, 人間関係, 集団の組織化過程に

関する複合過程理論⁽¹⁾——

永田 良昭

孤独感の研究は, “さびしい” という本人自身の孤独の思いとそれに伴う情動, 感情の記述から出発している (例えば, Russell, et al, 1978; Russell, et al, 1980; Rubenstein & Shaver, 1982; 落合, 1989)。⁽²⁾

孤独感研究の転機となったのは, これを本人にのみ原因が帰せられるとは限らない社会的な相互作用の欠如とし, 現象ではなく発生の機構からとらえようとする視点 (Weiss, 1973) が提出されたことであろう。Weiss (1973) は, 孤独感の発生に先行する状況と, 孤独感に伴う情動, 感情の面から 2 種の孤立状態の区別を提案する。1 つは情緒的孤立 (emotional isolation) と呼ばれ, 愛情, 親しい関係の欠如に由来するとした。感情としては, 子どもの分離不安に近似した不安感, いらだち, わびしさなどを伴うとされる。他は社会的孤立 (social isolation) と呼ばれ, 協同関係, 協同体との同一性 (identity) の欠如に対する反応である。社会的孤立は, “たいくつ” や “仲間はずれ” の感情と結びついているとされる。⁽³⁾ Shaver & Buhrmester (1983) は, これをもとに, 社会的相互作用過程で充足が要請される愛情, 親密さを心理的な親密さ (psychological intimacy), 協同関係への参加を社会的参画 (integrated involvement) と呼び, これらは社会関係において充足を要請される社会的欲求に対応すると仮定した。心理的親密さとは, 愛着 (Bowlby, 1969), 無条件の肯定的配慮 (unconditional positive regard) (Rogers, 1959), 自己開示 (self disclosure)

(Jourard, 1971) の可能な関係を意味し, 分配においては公正 (equity) ではなく必要に応じた分配, あるいは平等 (equality) を期待する (Deutsch, 1975) 関係であるとされる。社会的参画は, “目標達成への活動に参加し”, “貢献度で評価され”, “社会的同一性” が明確で “条件付の肯定的配慮 (conditional positive regard)” の関係を意味し “報酬が貢献度に比例して与えられる” 関係とされる。

Shaver & Buhrmester (1983) は, この2種の関係は, 社会関係における道具 (instrumental) 性と表出 (expressive) 性 (Parsons & Bales, 1955), 集団の目標達成と維持機能 (Cartwright & Zander, 1968) に対応し, 課題志向的リーダー (task leader) と社会的情緒的リーダー (socioemotional leader) (Bales & Slater, 1955) は, 社会的参画と心理的親密さの実現の機能であるという。⁽⁴⁾ しかし, Weiss (1973) の仮説と Shaver & Buhrmester (1983) の仮説は, 多くの研究者の関心を集めたとは言いがたい。

Weiss の仮説に対しては, 説明的に2つの孤独感を表現した評定項目を用いて, 基本的には一次元尺度と見なされている Russell, et al. (1980) の改定 UCLA 孤独感尺度の結果との関係も検討し, Weiss の区別しようとした2つの孤独感の関係は有意ではあるがその相関は低いこと, 改定 UCLA 孤独感尺度は項目によっては Weiss のいう社会的孤立に基づく孤独感と情緒的孤立に基づく孤独感との相関に有意な差が見られる場合があること, しかし改定 UCLA 孤独感尺度の得点と説明的な文章で表現された2つの孤独感の測定項目への反応の相関はいずれも有意であることを示した研究 (Russell, et al., 1984), ⁽⁵⁾ それと Russell, et al. (1984) の2つの孤独感の相関が高いこと, 改定 UCLA 孤独感尺度の得点と社会的孤立に基づく孤独感も情緒的孤立に基づく孤独感もいずれもが高い相関をもつことを示した研究 (Vaux, 1988) がある。

Vincenzi & Grabosky (1989) は “友人がいない” “集団や組織の一員と感じることがない” など Weiss (1973) の2次元を表現する15項目を作成し, 因子分析の結果, 社会的孤立, 情緒的孤立にもとづく孤独感との解

釈が可能な 2 因子を見出した。Clinton & Anderson (1999) は改定 UCLA 孤独感尺度の項目を Russell, et al. (1984) で示唆された Weiss (1973) のいう社会的孤立に基づく孤独感と関連する項目と情緒的孤立に基づく孤独感に関連する項目に分け, その 2 種の孤独感の相関, およびそれぞれと本人の報告した親しい友人の数, 親友の有無その他の性格特性との関連を検討した。結果は, 性格特性はここでは論じないとして, 2 種の孤独感の相関は高いこと, 男性の場合のみ, 友人の数と社会的孤立に基づく孤独感とは負の有意な相関を, 本人が相互選択関係にあると考える親友の有無と情緒的孤立とに負の有意な相関があることを示した。以上の諸研究の結果を総合すると 2 種の孤独感の区別が必要か否かは明確にされたとは言い難いようである。

問題の根本は, 孤独感の発生の機構への考察を含む孤独感の測定法が見出されていないことであろう。“孤独である”と感じることを主な指標とする現象的な接近法に固執する限り 2 種の孤独感を操作的に区別することは困難であろう。Rubenstein & Shaver (1982) は, “わたしは孤独な人間である” など NYU 孤独感尺度とともに, それに伴う感情を“絶望的”, “たいくつな”などの形容詞のリストから指摘することを求め, その形容詞への反応の因子分析によって孤独感の 2 つの次元が区別されるとした。これは, “孤独を感じる”ことを孤独感の定義としてしかも孤独感の分類を試みる巧妙な方法である。しかし, 本人自身に把握される感情が異なるとすれば, それは, “孤独”という“ことば”が孤独という概念で総括される必要のない 2 種の異なる感情を示す可能性もあろう。心理的な過程として 2 者が孤独感という一つの問題で包括的に論じられるべきであると主張する根拠の検討が必要であろう。Weiss (1973, 1989), Shaver & Buhrmester (1983) の仮説の問題点がここにあるように思われる。

しかし, 孤独感と呼ぶか否かは別として, 個人の内的な心的過程と人間関係, 集団・組織過程との機能的な関連を検討する 1 つの手懸かりとして Shaver & Buhrmester (1983) の考察は示唆に富むように思われる。ここ

で, 人間関係, 集団・組織過程において, その基本的な機能の担い手になり得ていないことに伴う感情をとりあえず孤独感とし, その発生の機構を検討することから孤独感について考察してみたい. この場合の難点は, そこで捉えられたものが従来と同じ意味での孤独感と呼ばれるにふさわしいものか否かの検討であろう. しかし, これは, 最終的には構成概念妥当性の検討に相当することであり, 早急に結論を得ることは困難であると思われる.

Shaver & Buhrmester (1983) の考察には 2 種の孤独感に関係するとされる孤立状態に対応した人間関係, 集団・組織過程の 2 つの機能の発生の機構への考察は見られない. これは, Shaver らに限らず, かれらの仮説の根拠とされた諸研究に共通する問題である. その最も重要な問題は, この 2 次元の関係であり, これに対応するとされる 2 種の孤独感が区別されつつ孤独感の概念で総称される理論的な理由が明らかでないことであろう.

永田 (1972) は, Bales (1965) など Shaver らが論拠とした実験研究の結果をも援用し, また Newcomb (1953) の対人魅力の成立に関する認知された類似性の意味を考察した仮説および関連する実証研究を論拠として次のように述べたことがある.

“組織目標の達成という側面からみれば, その目標の達成への個々の組織構成員の貢献が問題にされ, 最も貢献度の高い者を活動の中心においた階層構造が成立する. しかし, そこに成立する階層構造自体は, 人々の感情的な結合をさまたげる条件ともなり, 異なる位置を占める人々の間の強い感情的結合を期待することを困難にさせる. (中略) 目標の効果的な達成を第一義とする手段的, 道具的な人間関係を支配する原理と, 協同目標を排除した後に現れる相互の存在そのものを受容する人間関係を成立させる原理が基本的には相容れない対立し合うものであるということであろう. 前者は人と人との相互的な関係に基づく活動の結果として獲得されるものが重要な意味を与えられる過程であるから, 組織のもつ適応的, 道具的な機能と呼ぶことができるのであり, 後者は関係の結果ではなく, 人と人と

の関係それ自体が重要な意味をもつ過程と考えられるから, 組織のもつ消費的あるいは自己完結的機能と呼ぶことができよう (p.95).”

以下, 本稿では, 筆者の用語に従って, 人間関係, 集団・組織過程の2つの次元を道具性 (的機能), 自己完結性 (的機能) と呼ぶ。

協同的活動がそれ自体, 道具性の実現と自己完結性の実現の過程において基本的な矛盾を内包するという仮説は, 前者が目標への認知された貢献度の差異に応じて関係を構造化すること, すなわち, 地位と役割の体系としての関係を構成し, それは関係する人びとの差異化の過程であるのに対し, 後者は認知された類似性を手懸かりとする相互理解の過程であることに基づいている。この矛盾を顕在化させて構成員間の感情的な結びつきを崩壊させないためには, 構成員の貢献度の極度の差異化を顕在化させないことが望ましい。その1つの現れとして, 成員の貢献度の差異を顕在化させないように集団の目標を極端に高い水準に設定させない力が働くことが予想される (永田, 1978, p.220 ~)。(6)

しかし, 目標達成への努力が重要である場合, 目標達成という点での構成員間の高次の合意が地位と役割の相違による構成員間の差異を顕在化させず, 目標達成への意図の類似性が相互理解の成立を認知させる可能性があると考えられる。実際に, 構成員の道具的機能の実現を高度に期待する態度と自己完結的機能の実現を期待する態度は, 集団が目標を達成できるとの見通しが確認された後には負の相関をもち, さらに目標達成への努力が必要であると認知された場合には正の相関をもつことが実験的に確かめられている (永田, 1980)。(7)

ここで, 第一に, 人間関係, 集団・組織過程の道具性と自己完結性の実現の不全感と2つの孤独感が対応するとすれば, 社会的孤立に基づく孤独感と情緒的孤立に基づく孤独感の2次元は独立ではないと仮定される。相互の矛盾を内包しつつ, 人と人の関係の状況によって, 正, 負のいずれの関係をも示し得ると予想される。Weiss (1973) の仮説を支持するかに見える事実と, 否定するかに見える事実が見出されるのはそのためであろう。

しかし、永田 (1996) は、見解の異なる他者との能動的なコミュニケーション行為には、本人自身が当該事象に対する構造化され安定した態度を保持しているか否かと、コミュニケーションの相手への積極的な接近の態度とが関係し、これらの条件によってコミュニケーションの相手の役割の取得の程度が高まる可能性を示唆する実験結果を得た。他者への能動的なコミュニケーション行為、その他者の役割を取得しようとする態度は、協同を必要とする課題の共有の認知と無関係ではないと予想される。相互理解の相対的に困難な他者への能動的なコミュニケーション行為を触発する契機の1つとして、相互依存的な努力を必要とする協同目標の認知が必要であり、また、相互依存的な協同の必要性の認知は、相互理解への要求を反映している可能性があると考えられる。両者は相互規定的な関係にあると予想されるが、未知の関係からの関係形成の経過と見れば、関係の道具性の認知、すなわち目標の共有の可能性、相互に可能な貢献の探索の過程で否応なく認知される可能性のある非類似性の認知を前提として、初めて類似性も認知されるのではないかと考えられる。相互依存的な関係を前提としない自己完結的な関係の成立の契機を何に求め得るか、そもそも何を契機として相互に理解可能か否かを知らうとするかの説明が困難ではないかと思われるからである。しかし、道具性の成立は自己完結性の成立をもたらすとは限らない。道具的機能の実現の過程で相互の差異 (非類似性) の認知が、関係の崩壊をもたらす可能性があるからである。以上の過程に個人の内的過程としての孤独感に対応するのであれば、社会的孤立に基づく孤独感の発生は必然的に情緒的孤立に基づく孤独感の発生をもたらすが、情緒的孤立に基づく孤独感の発生背後には社会的孤立に基づく孤独感があるとは限らないことになる。ここに2つの孤独感が区別される理由と、両者がともに孤独感と呼ばれる理由があると考えられる。

さて、他者との関係において、道具的機能の分担を背景とする社会的参画への欲求が充足されるということは、直接に対面的な関係にある他者と

の間に機能的な協同関係, すなわち地位と役割の関係への自己定位が成立することを意味する。しかし, 社会的参画が Shaver らの考察のように社会的同一性の確認を意味するとすれば, それは単に地位と役割を取得することでは実現できないように思われる。永田 (1998) は, 社会的同一性の概念を Kuhn & McPartland (1954) にならい, 本人自身に“成員資格, 成員の範囲が自明であるとみられる集合体への位置づけ”が成立しているか否かを指標として, ただし社会的同一性の概念はやや多義的に用いられていることから, これを集合的同一性と呼び, 一般にわれわれには集合的同一性の確認への要求が存在すると仮定できること, 集合的同一性の確認が個性化の確認である人格的同一性の明確化の手掛かりになるとの仮説を提出した。

ここでいう集合的同一性は, 対面的な関係においてしかるべき機能を取得して役割と地位を確定するのみでなく, その機能の取得に係わる集合体の一員であることを確認する際に上記の意味での集合的概念として捉えられることによって, 対面的関係にない他者との関係を含むさらに大きな社会システムの一員としての自己の定位を可能にさせ, その上で自己の独自性の確認が可能になるとの仮説である。その場合の社会システムの範囲は同一性の確認を必要とする文脈によって変化する可能性があろう。集合的同一性は, 性, 年齢, 職業などと固定的に捉えられるものではないと考えられる (永田, 1998)。本稿で報告する研究の目的は, 以上の考察を背景として, 第一に, 孤独感の2つの次元をとらえるための信頼性のある尺度を構成すること, 第二に2つの孤独感尺度がとらえたものを明確にする手懸りとして, 集合的同一性, 人格的同一性の確立の程度と孤独感の関係を検討するとともに, さらに直接的な自己の社会的定位の様態を把握するために“本当の自己の所在” (Turner, 1976; 伊藤, 1985) との関係を検討すること, 第三に2種の孤独感の関係を検討するための資料を提示することである。

I. 孤独感尺度の項目の選定と内的整合性信頼性 および因子的妥当性の検討

研究 1 孤独感尺度原案の信頼性と内部構造

目的: 孤独感を測定する尺度の作成とその信頼性, 因子的妥当性の検討を行なう。

方法: (1) 項目の作成 前項の孤独感の発生機構の考察をもとに項目を作成した。また NYU 孤独感尺度とその内容となる 2 種の感情の次元 (Rubenstein & Shaver, 1982) を参考にした (表 1)。なお, 高齢者の資料の収集も予定したため, 質問項目数は極力少数とし, 社会的孤立に基づく想定される孤独感すなわち社会的参画感の欠如に基づく孤独感の尺度とし

表 1 孤独感尺度原案の項目

項目番号 ^り	社会的孤立に基づく孤独感測定尺度の項目
1.	日々の生活に張りがある。
2.	日々はつらつと生きているという実感がある。
4.	希望に満ちた生活だと感じることがある。
5.	もっと意義のある生活がしたいと思うことがある。
9.	自分の生活は充実していると実感することがある。
項目番号 ^り	情緒的孤立に基づく孤独感測定尺度の項目
3.	自分はひとりぼっちだと感じることがある。
6.	漠然とした不安をおぼえることがある。
7.	自分をかけがえのない存在だと実感することがある。
8.	ふとわびしい気持ちになることがある。
10.	どことなく気が晴れないことがある。

^り 項目番号は測定時に 2 種の孤独感尺度の項目を無作為に配列した順序を示す。

て5項目, 情緒的孤立に基づく想定される孤独感すなわち心理的に親密な関係の欠如に基づく孤独感を測定するための5項目を作成した(以下では“想定される”のことは省略する)。各項目に対して, 項目表現に応じて“非常にある”あるいは“しばしばある”から“まったくない”の5段階の回答選択肢が用意された。

社会的孤立に基づく孤独感尺度では, 項目番号 1, 2, 4, 9 は逆転項目で, 項目の内容を否定する程度が強いほど高得点となる。情緒的孤立に基づく孤独感測定 of 尺度の場合は項目 7 が逆転項目となる。(2) 教示 “日々の生活の漠然とした気分について” “直観的に” 回答されるようにとの趣旨の教示を行なった。(3) 資料収集の方法 ここでは4群に大別される調査参加者群の資料が検討される。すべて, 他の研究目的の調査項目と同時に収集されている。大学生は, 筆者の所属する学科の学生に大学の友人に配布して回答を依頼するよう求めた。また, 中, 高年の成人は, 大学生に, 父母, 知己に回答を依頼するよう求めた。また, 放送大学の面接授業参加者にも授業担当者を通じて協力を求めた。すべて, 質問紙を封筒に入れて手交し, 各自適宜都合のつく時間に回答を記入して封筒に入れ, 一週以内に仲介者あるいは授業担当者(放送大学)に提出するよう求めた。教示は質問紙の表紙に印刷されている。(4) 調査参加者 以下の4群にわけられる。以下, それぞれ資料 1, 2, 3, 4 と呼ぶ。資料 1 は東京都内の4年制大学に在学する男子学生 101 名。年齢無記入の4名を除く年齢の平均値は 20.7 歳(標準偏差 0.80)。資料 2 は東京都内の4年制大学に在学する女子学生 121 名。年齢の平均値は年齢無記入4名を除き 19.0 歳(標準偏差 0.76)である。資料 3 は全員有職の既婚男性 76 名。年齢無記入4名を除く平均年齢 43.2 歳(標準偏差 11.49)。資料 4 は既婚女性 125 名で年齢無記入7名を除く平均年齢は 44.5 歳(標準偏差 8.32)。うち 57 名が有職(常勤)である。成人の資料は, 放送大学なども含み, 学生の父母に限定されないため, 年齢幅が広い。資料数は回答の記入もれのあるもの等を除く有効回答数である。

孤独感の構造, 集合的同一性, 人格的同一性および本当の自己の所在 (永田)

調査時期: 資料 1 ~ 4 とともに 1987 年から 1989 年までの間に収集され, 同一年度に収集されたわけではない。

結果と考察: 各資料は個別に社会的孤立に基づく孤独感尺度と情緒的孤立に基づく孤独感尺度のそれぞれについて項目間の積率相関を求め, 尺度別に因子的妥当性を確認する目的で主因子法による 2 因子解で因子分析を試みた。予備的な検討の結果, 項目 5 と 7 が当初想定された尺度内では他の項目との一貫した関係を示さず因子的位置も明確でないことが示されたため, この 2 項目は両尺度の内的構造の検討の際にもそれぞれの尺度に加えた。結果は表 2-1 から表 2-4 に示されている。表 2 は, 1 次元性の検討が目的であり, 相関係数は 0.1% 水準以下の危険率の場合のみ有意性を明示した。項目 5 は資料によっては情緒的孤立に基づく孤独感の項目と, 項目 7 は社会的孤立に基づく孤独感と関連を示す場合があるが, 一貫した整合性をもつとは云えない。その他はそれぞれ一つの尺度を構成するに十分な相関および因子構造をもつと考えてよいであろう。

信頼性のある尺度の構成のためには項目 5, 7 を除外することが適当と判断される。その結果は, 両尺度が, 全項目が逆転項目になる (各項目を肯定する程度が強い場合に孤独感が高いとする) 場合と, 逆転項目を全く含まないかのいずれかとなり, 尺度の構成としては, 各項目への否定的回答の意味を推論しにくい, 表面的妥当性だけに依存するものではないためとくに問題はないと考えられる。

研究 1 補 孤独感尺度最終案の信頼性と内部構造

目的: 研究 1 にさらに資料を追加して尺度の信頼性と因子的妥当性を確認する。

方法: (1) 項目の選定 研究 1 の結果から整合性を欠くと見られる項目 5 と 7 を除外したもの。(2) 教示 研究 1 と同じ。(3) 調査参加者 資料 1 から 4 までは研究 1 と同じ。資料 5 は永田 (1998) の第二次調査の回答

孤独感の構造, 集合的同一性, 人格的同一性および本当の自己の所在 (永田)

表 2-1 孤独感尺度原案項目の相互相関と
主因子分析における因子構造

資料 1: 大学生男子 (人数 101 名)

社会的孤立に基づく孤独感測定尺度の項目								
項目番号	項 目 間 相 関					因子構造		
	2.	4.	5.	7.	9.	I	II	h^2
1.	.788	.614	.259	.196	.611	.880	.123	.790
2.		.603	.261	.152	.556	.843	.170	.739
4.			.136	.269	.584	.759	-.247	.637
5.				-.050	.217	.271	.277	.151
7.					.202	.253	-.361	.194
9.						.711	-.068	.510
寄与率						45.1%	5.3%	

情緒的孤立に基づく孤独感測定尺度の項目								
項目番号	項 目 間 相 関					因子構造		
	5.	6.	7.	8.	10.	I	II	h^2
3.	.199	.362	.146	.428	.420	.522	-.150	.295
5.		.341	-.050	.408	.396	.487	.233	.292
6.			.085	.609	.553	.722	.015	.521
7.				.153	.046	.135	-.512	.280
8.					.597	.822	-.063	.680
10.						.762	.099	.591
寄与率						38.4%	5.9%	

相関係数の太字は $p < .001$ で有意であることを示す。

者である。成人の既婚の女性 110 名で年齢平均は 44.9 歳、範囲は 32 ~ 64 歳。82 名が有職者である。資料収集の方法は永田 (1998) を参照。資料 6 は、筆者の所属する大学の女子学生 80 名である。年齢平均は 20.3 歳 (標準偏差 2.88)。ただし、年齢無記入 3 名がある。資料 5, 6 は各尺度 4 項目のみで実施されている。

方法と調査時期: 資料 1 ~ 4 は研究 1 参照。資料 5 は 1994 年 10 月 ~

孤独感の構造, 集会的同一性, 人格的同一性および本当の自己の所在 (永田)

表 2-2 孤独感尺度原案項目の相互相関と
主因子分析における因子構造

資料 2: 大学生女子 (人数 121 名)

社会的孤立に基づく孤独感測定尺度の項目								
項目番号	項目間相関					因子構造		
	2.	4.	5.	7.	9.	I	II	h^2
1.	.590	.562	.262	.163	.550	.767	.207	.631
2.		.608	.193	.162	.465	.720	.132	.536
4.			.243	.359	.534	.807	-.136	.669
5.				.045	.276	.317	.103	.111
7.					.236	.352	-.562	.440
9.						.686	.031	.471
寄与率						40.9%	6.8%	

情緒的孤立に基づく孤独感測定尺度の項目								
項目番号	項目間相関					因子構造		
	5.	6.	7.	8.	10.	I	II	h^2
3.	.114	.360	.207	.383	.338	.507	.212	.302
5.		.318	.045	.230	.352	.458	-.537	.498
6.			.200	.482	.407	.647	-.001	.418
7.				.248	.128	.280	.188	.114
8.					.556	.757	.178	.605
10.						.688	-.071	.478
寄与率						33.5%	6.8%	

相関係数の太字は $p < .001$ で有意であることを示す。

1995 年 3 月の間に基本的には資料 1 ~ 4 と同じ方法で収集された。資料 6 は 1999 年 6 月に一斉調査で収集された。

結果と考察: 表 3 に各資料別に各項目の主因子分析法による 1 因子のみを抽出した因子負荷量と尺度の信頼性係数 (標準化 α 係数) が示されている。表 2 の因子負荷量と相違があるのは削除された項目があること, 1 因

孤独感の構造, 集合的同一性, 人格的同一性および本当の自己の所在 (永田)

表 2-3 孤独感尺度原案項目の相互相関と
主因子分析における因子構造

資料 3: 職業をもつ成人男子 (人数 76 名)

項目番号	社会的孤立に基づく孤独感測定尺度の項目					因子構造		
	項目間相関							
	2.	4.	5.	7.	9.	I	II	h^2
1.	.838	.454	.328	.209	.404	.821	.351	.798
2.		.608	.331	.273	.427	.906	.234	.875
4.			.114	.470	.497	.760	-.432	.764
5.				-.010	.209	.309	.253	.160
7.					.305	.407	-.403	.328
9.						.556	-.154	.333
寄与率						44.0%	10.2%	

項目番号	情緒的孤立に基づく孤独感測定尺度の項目					因子構造		
	項目間相関							
	5.	6.	7.	8.	10.	I	II	h^2
3.	.237	.468	.154	.561	.446	.710	-.044	.506
5.		.227	-.010	.254	.009	.276	.292	.162
6.			.049	.600	.369	.693	.127	.496
7.				-.027	.132	.097	-.203	.051
8.					.422	.811	.197	.697
10.						.611	-.455	.580
寄与率						35.0%	6.5%	

相関係数の太字は $p < .001$ で有意であることを示す。

子の抽出にとどめたためである。年齢、性別の異なる資料を通じて、各尺度とも信頼性と因子的妥当性を認め得ると考えられる。

孤独感の構造, 集合的同一性, 人格的同一性および本当の自己の所在 (永田)

表 2-4 孤独感尺度原案項目の相互相関と
主因子分析における因子構造

資料 4: 既婚の成人女子 (人数 125 名)

社会的孤立に基づく孤独感測定尺度の項目								
項目番号	項目間相関					因子構造		
	2.	4.	5.	7.	9.	I	II	h ²
1.	.760	.539	.291	.334	.601	.807	-.193	.688
2.		.578	.323	.317	.622	.870	-.302	.849
4.			.255	.348	.653	.740	.243	.606
5.				.143	.274	.355	-.040	.128
7.					.371	.425	.135	.199
9.						.801	.243	.701
寄与率						48.4%	4.4%	

情緒的孤立に基づく孤独感測定尺度の項目								
項目番号	項目間相関					因子構造		
	5.	6.	7.	8.	10.	I	II	h ²
3.	.307	.428	.062	.486	.309	.531	.011	.282
5.		.491	.143	.415	.349	.585	-.363	.474
6.			.077	.659	.520	.790	-.078	.630
7.				.029	.076	.105	-.209	.055
8.					.583	.885	.299	.873
10.						.638	.041	.409
寄与率						40.8%	4.5%	

相関係数の太字は $p < .001$ で有意であることを示す。

表3 孤独感尺度最終案の項目と主因子分析の結果および信頼性係数

社会的孤立に基づく孤独感尺度 項目番号 ¹⁾	因子 負 荷 量					
	資料1	資料2	資料3	資料4	資料5	資料6
1. 日々の生活に張りがある .	.884	.772	.808	.811	.862	.782
2. 日々はつらつと生きている という実感がある .	.841	.751	.953	.849	.859	.637
3. 希望に満ちた生活だと感じ ることがある .	.735	.774	.657	.723	.771	.694
4. 自分の生活は充実している と実感することがある .	.708	.675	.532	.783	.799	.881
主因子法による1因子の寄与率	63.3%	55.3%	56.9%	62.8%	67.8%	56.9%
信頼性係数 (標準化 α 係数)	.870	.831	.823	.870	.841	.834
情緒的孤立に基づく孤独感尺度 項目番号 ¹⁾	因子 負 荷 量					
	資料1	資料2	資料3	資料4	資料5	資料6
1. 自分はひとりぼっちだと感 じることがある .	.527	.515	.709	.535	.734	.561
2. 漠然とした不安をおぼえる ことがある .	.732	.626	.697	.773	.839	.580
3. ふとわびしい気持ちになる ことがある .	.811	.784	.809	.878	.907	.838
4. どことなく気が晴れないこ とがある .	.754	.680	.557	.652	.860	.840
主因子法による1因子の寄与率	51.0%	43.3%	48.8%	52.0%	70.1%	51.5%
信頼性係数 (標準化 α 係数)	.797	.744	.785	.798	.855	.794
人数	101	121	76	125	110	80

¹⁾項目番号は便宜上のものである。実施の場合には2つの尺度の項目を無作為に混合配列している。ただし、資料1～4の場合の項目配列順序は表1を参照。

Ⅱ. 孤独感尺度の外部基準妥当性の検討および 2つの孤独感の関係に関する補足的検討

研究2 孤独感と防衛的態度あるいは自己概念への 認知的不協和耐性の関係

目的: Shaver & Buhrmester (1983) は, 情緒的孤立に基づく孤独感は, 自己開示を可能にし防衛的である必要がなく自己提示に配慮する必要のない対人関係の欠如に起因するとしている. 防衛的態度は自己評価の低さと自己概念の不安定さに随伴し, 既成の自己概念と認知的な不協和をもたらす可能性のある情報の回避の傾向を意味していると予想される. 自己概念への不協和情報への耐性の低さに関係するとの予想である. これがここでの検討課題である.

方法: 自己提示における防衛性または自己概念に対する認知的不協和情報の回避または耐性のなさの測定. “知人, 友人, 家族など身近な人の中から, 最もよく気が合う” 人と, “あまり気が合わないと思う” 人を想定してもらい, その人が, 1) あなたをどのように思っているか気になることがありますか, 2) あなたをどのように思っているか知りたいと思いませんか, の2項目に, “いつも”, “しばしば”, “ときどき”, “たまに”, “めったにない” の5段階での評定を求める.⁽⁸⁾

調査参加者は資料6と同じである. 資料6の収集の際に同時に上記の項目による資料も収集された.

結果と考察: まず2つの孤独感と“気が合う”相手と“気が合わない”相手が自分をどう思っているか“気になる”と“知りたい”との関係を個々に積率相関係数を求めて検討した. その結果, 情緒的孤立に基づく孤独感の高さと“気が合う人”が“自分をどう思っているかが気になる”こととが有意な相関を示した ($r = .238, t_{(78)} = 2.168, p < .05$).

社会的孤立に基づく孤独感は, “気が合う” 相手の場合も “気の合わない相手” の場合も “気になる”, “知りたい” とは負の相関を示す. “気が合わない” 相手が自分をどのように思っているかが “気になる” ことと社会的孤立に基づく孤独感との相関は -0.206 を示すものの有意とは云えず, その他は相関係数そのものが零に近い. 念のために自己概念に関する認知的不協和耐性の測定 “気になる”, “知りたい” の 2 項目の関係を見るために “気があう” 相手と “気が合わない” 相手のそれぞれ毎に 2 項目の相関を求めたところ “気が合う” 相手の場合は $.856$ ($t_{(78)} = 14.650$ $p < .001$), “気が合わない” 相手では $.832$ ($t_{(78)} = 13.230$ $p < .001$) であった. この結果は “気になる”, “知りたい” の 2 項目をもって一つの尺度を構成する可能性を示す. しかし, 上記のように孤独感との関係が異なることから 2 項目の合併には検討の余地があろう.

“気が合う” 相手について “気になる”, “知りたい” ということは, 自己概念に協和的な情報の補強を求める態度の反映の可能性がある. 気が合う相手は自己概念に不協和な情報を提供する可能性が少ないことから “気が合う” 可能性があるからである. そうであれば, 自己概念に関する認知的不協和の低減への力の指標になり得るであろう.

一方, “気が合わない” 相手の, 自己への認知が “気になる” のも自己概念への確信のなさ, 不安定さの表現であると思われる. しかし “気が合わない” 相手からの自己についての情報が自己概念への不協和情報である可能性があるにも拘らずそれを “知りたい” という態度は, その相手と “気が合わない” 関係を解消しようと動機づけられていることを示すとも考えられよう. “気になる” が “知りたくない” 可能性を考慮する必要がある. これが, “気になる”, “知りたい” の両項目を合併しない理由である. 同時に, このような理解に立てば, 情緒的孤立に基づく孤独感は, 自己概念への確信のなさ, 不安定性, 自己概念に含まれる認知的不協和が大きい可能性を示していると考えられる.

研究 3 孤独感と本当の自己の所在

目的：本当の自己 (real self) の所在, すなわち本人自身が最も自己の存在感を実感できる状況を本人の表現によってとらえ, 孤独感との関係を検討する. 本当の自己の所在は本人の認知した自己と社会の関係を示す指標になり得ると考えられる (Turner, 1976) .

孤独感は, 直接的な対人関係での適切な関係の欠如のみでなく, 巨視的な社会システムと自己の関係への認識を背景としているとの仮説が妥当であれば, 本当の自己の所在の認識において, それが社会的な広がり (Turner の云う制度), Kuhn & MacPartland (1954) の定義する社会的同一性—本稿では集会的同一性と云う—の確認の程度と関係すると思われる. 以上を検討する.

方法：(1) 本当の自己の所在の測定 “普段の生活で, あなたが最もあなたらしさを発揮していると感じられる時, あるいはまさにこれが自分なのだと感じられるのはどのようなときでしょうか?” の教示によって8項目の中から重複選択を認めて当てはまるものを選択してもらう. 項目は次の通りである. 1. 親しい人 (例えば, 家族, 友人など) とくつろいでいるとき. 2. 専門的な知識や技術, 資格がほかの人の役に立っていると感じられるとき. 3. 独りで誰にも邪魔されないで好きなことに打ち込んでいるとき. 4. 国家試験に合格したり, 容易には取れない公的資格をとったとき. 5. 誰かと本当に親しくなれて理解し合えたと感じられるとき. 6. 独りで気ままに過ごしているとき. 7. 賞をもらったり, 世間の人々が認めるような成功を納めたとき. 8. 会社や団体の一員として, または職業人として世間から認められたとき. Turner (1976) に従えば, 項目 2, 4, 7, 8 は制度との関係に, 項目 1, 3, 5, 6 は私的要求すなわち衝動の実現の場に自己を位置づけている場合に選択される可能性がある.

(2) 調査参加者と調査時期 資料 5 と同じ. 資料 5 と同時にこの調査

も実施された。既婚の女性である。

調査時期：1994年10月～1995年3月。

結果と考察：(1) 項目ごとの選択数 各項目の選択者数を見ると、項目1は53名(48.2%)、項目2は37名(33.6%)、項目3は43名(39.1%)、項目4は1名、項目5は33名(30.0%)、項目6は12名、項目7は1名、項目8は12名である。項目4,6,7,8は選択者が少ないため、結果の考察からは除外される。

(2) 孤独感と制度への関与、衝動の実現に係わる態度との関係 2種の孤独感をそれぞれの得点の中央値を基準として高、低に分割し、調査参加者を 2×2 の4群に分割した。これに当該項目の選択、非選択を組み合わせ、3要因の固定モデルによる尤度比検定(篠原, 1989)を行なった。その結果は、項目2“専門的な知識や技術、資格がほかの人の役に立っていると感じられるとき”(以下、“専門的資格”と云う)において、3変数の交互作用が有意($\chi^2_{L(1)} = 8.283 \quad p < .01$)となり、2つの孤独感がともに低い群において、また2つの孤独感がともに高い群において当該項目を選択した者の比率が有意に高いこと、社会的孤立に基づく孤独感が低く、情緒的孤立に基づく孤独感が高い群において当該項目を選択する者の比率が有意に少ないことが示された(表4)。また、項目5“誰かと本当に親しくなれて理解し合えたと感じられるとき”(以下、“理解し合う”と云う)において、情緒的孤立に基づく孤独感の高・低と当該項目の選択者の比に有意な連関が見られ、情緒的孤立に基づく孤独感の低いときにこれを選択している者の比率が高い($\chi^2_{L(1)} = 3.855 \quad p < .05$)ことが示された。表5はこの結果を示したものである。

“理解し合う”関係においてもっとも自分らしい自己を見出すとした者が情緒的孤立に基づく孤独感が低いことを、“理解し合う”関係の経験者であるがゆえにこの選択が可能であるとすれば、われわれの情緒的孤独感の発生的定義に合致した孤独感尺度の妥当性をも意味する結果といえよう。

孤独感の構造, 集合的同一性, 人格的同一性および本当の自己の所在 (永田)

表4 2つの孤独感と“本当の自分”と感じられるときとして“専門的な知識や技術, 資格がほかの人の役に立っていると感じられるとき”を選択した者とししない者の比率の関係 (資料5)

社会的孤立に基づく孤独感 情緒的孤立に基づく孤独感	低い		高い	
	低い	高い	低い	高い
非選択者	23 ¹⁾ 1.64 ²⁾	21 -0.13	10 -2.02**	19 0.44
選択者	14 2.00**	2 -3.65***	4 -1.72	17 3.47***
計	37	23	14	36

¹⁾人数

²⁾調整後残差

*** $p < .01$

** $p < .05$

表5 2つの孤独感と“本当の自分”と感じられるときとして“誰かと本当に親しくなれて理解し合えたと感じられるとき”を選択した者とししない者の比率の関係の比率 (資料5)

社会的孤立に基づく孤独感 情緒的孤立に基づく孤独感	低い		高い	
	低い	高い	低い	高い
非選択者	23 1.27 ²⁾	19 -1.24	8 -3.07***	27 2.99***
選択者	14 2.54**	4 -2.44**	6 -0.45	9 0.43
計	37	23	14	36

¹⁾人数

²⁾調整後残差

*** $p < .01$

** $p < .05$

しかし, “専門的資格” が2つの孤独感がともに低い場合とともに高い場合の双方で選択者の比率が高いことは, この選択の意味が一義的でない可能性を示唆している. 社会的な孤立に基づく孤独感と情緒的な孤立に基づく孤独感の高さをそれぞれ中央値を基準として高・低に2分し, 両者の高・低の組み合わせによって4類型を区分して“専門的資格”と“理解し合う”の選択の有無の連関を ϕ 係数で求めると, 2つの孤独感がともに低い場合 .379 ($p < .05$), とともに高い場合が .096, 社会的孤立に基づく孤独感が高く情緒的孤立に基づく孤独感が低い場合は .101, 前者が低く後者が高い場合が .116 である. 2つの孤独感がともに低い場合は“専門的資格”と“理解し合う”の双方の選択が多いわけではなく, むしろ両者をともに選択している者は37名中で2名(項目別に見ると“専門的資格”, “理解し合う”それぞれが38%)である. 他方, 2つの孤独感が共に高い場合は“専門的資格”と“理解し合う”の双方を選択しているものは36名中5名である. ϕ 係数の相違は, 2つの孤独感が共に高い群において“専門的資格”のみを選択している者が47%を占め, “理解し合う”を選択している者が25%に過ぎないことに由来している. この意味はここでの資料では解釈が困難である. しかし, 後者の場合, “専門的資格”の選択者の比率に対して“理解し合う”を選択している者の比率が少ないことは, これらの資料に表現されていないこの群の人々を特徴づける状況, 条件の存在を示唆する可能性はあろう. 社会的な活動の経験が自己充足感, 自己実現感をもたらす場合と, 社会的な活動が自己の存在証明であると本人に理解されるにも拘らず充実感を実感しにくいこと, したがって対人関係においても“理解し合う”経験をもちにくい状況の存在の可能性である.

Turner (1976) は, われわれの社会が, こうした制度上に自己を定位することによる本当の自己を実感させることから, 衝動の実現に自分らしい自分を見出す方向に変化していると指摘する. 集合的な自己同一性の確認の心理的意義が薄れつつあるのではなく, 意義を見出し得ないようになるとの予測と理解される. われわれの結果は, 集合的同一性の拠所になり得

る自己概念が, リアリティをもった自己概念になり得ない場合があることを示唆している. 項目 1, 3 については, 選択数がある程度みられたが, 孤独感との有意な関連は見出されなかった.

以上, 社会的孤立に基づく孤独感が社会システム上での自己の位置づけに関係し, 情緒的孤立にもとづく孤独感は相互理解を基礎とした人間関係に関連する可能性を示していること, しかし, 社会的孤立に基づく孤独感と社会システム, あるいは制度と云われるものの関係の機構は今後の検討をまたなければならないと云えよう.

研究 4 孤独感と自己同一性の確立

目的: 目標達成という道具的な社会的活動の場で適切な役割を取得することの欠如に由来するとされる社会的孤立に基づく孤独感は, 単に対面的な人間関係との係わりのみでなく, 巨視的な社会システムと自己の関係を明確化することすなわち集団的同一性の確立の意味をもつとの仮説を検討する.

方法: 同一性の確立の程度の測定 本人の一般的な他者への自己紹介文にあらわれる自己記述文を Kuhn & McPartland (1954) の定義に基づいて内容分析を行なう. すなわち, 自己記述に用いられている概念を, 性, 年齢, 学歴, 職業など成員資格が自明の集合体への位置づけを示すと見られるものと, 性格, 能力などの成員資格の境界が明確でないものに区分し, 前者に属する概念の種類数が多いほど集合的同一性の確立度が高く, 後者に属する概念の使用種類数が多いほど人格的同一性の確立の度が高いとする. 内容分析の方法, 分析カテゴリー, 同一性確立の程度の指標の詳細は永田 (1998) を参照. 調査参加者は, 資料 5 と同じである.

結果と考察: 集合的同一性と人格的同一性の確立の程度と 2 種の孤独感の関係 表 6 は関係する変数の積率相関係数を示す. 集合的同一性の確立の程度が高いほど 2 種の孤独感が低いことを示している. 人格的同一性の

確立の程度と孤独感とは関連があるとは云えない。

2つの同一性を交絡させて孤独感との関係の検討を試みたものが表 7-1, 7-2 である。両同一性の確立の程度の高, 低は中央値で分割し, 孤独感の高, 低も中央値で分割し, $2 \times 2 \times 2$ の 3 変数の固定モデルによる尤度比検定を試みた。表 7-1, 7-2 の縦計を見ると, 集合的同一性と人格的同一性の確立の程度は顕著な連関を示すことが読み取れる ($\chi^2_{(1)} = 9.373 p < .01$)。

社会的孤立に基づく孤独感と集合的同一性, 人格的同一性との連関はいずれも有意とはいえない。情緒的孤立に基づく孤独感は, 集合的同一性の確立の程度との連関が有意 ($\chi^2_{(1)} = 4.889 p < .05$) で, 集合的同一性が確立されている程度が高いとき情緒的孤立に基づく孤独感が低い者が多い。人格的同一性の確立は有意な関係をもつとは云えない。また 3 変数の交互作用も有意とは云えない。すなわち, 集合的同一性と人格的同一性を組み合わせて同一性確立の類型を設定して孤独感の高さを比較すると類型間に有意な差があるとは云えない。交互作用が有意でないが, 参考として表 7-2 は残差を示している。

情緒的孤立に基づく孤独感が集合的同一性の確立の程度と関係することはわれわれの仮説の妥当性を示すものであると考えられよう。

表 6 集合的同一性、人格的同一性確立度と
2種の孤独感の強さとの相関係数
(資料 5 人数 110 名)

	社会的孤立に基づく 孤独感	情緒的孤立に基づく 孤独感
集合的同一性の確立度	-.195*	-.224*
人格的同一性の確立度	-.169	-.177

* $p < .05$

孤独感の構造, 集合的同一性, 人格的同一性および本当の自己の所在 (永田)

表 7-1 社会的孤立に基づく孤独感と集合的同一性
および人格的同一性の確立の程度の関係 (資料 5)

集合的同一性の確立度 人格的同一性の確立度		高い		低い	
		高い	低い	高い	低い
孤 独 感	高い	20 ¹⁾ 0.40 ²⁾	5 -1.68	12 -1.21	13 2.78
	低い	29 2.21	7 -1.50	14 -1.54	10 0.66
計		49	12	26	23

1) 人数

2) 調整後残差表

*** $p < .01$

* $p < .05$

表 7-2 情緒的孤立に基づく孤独感と集合的同一性
および人格的同一性の確立の程度の関係 (資料 5)

集合的同一性の確立度 人格的同一性の確立度		高い		低い	
		高い	低い	高い	低い
孤 独 感	高い	22 ¹⁾ -0.11 ²⁾	5 -2.27*	14 -1.43	18 4.30***
	低い	27 2.78***	7 -0.87	12 -1.31	5 -1.04
計		49	12	26	23

1) 人数

2) 調整後残差

*** $p < .01$

* $p < .05$

補足研究 2つの孤独感の関係の検討

目的: これまでの資料を一括して2つの孤独感の関係を吟味する。しかし, この資料は, われわれの仮説を直接証明する材料にはなり得ない。なぜなら, 情緒的孤立に基づく孤独感を規定する十分条件が明確に仮説化されていないために, われわれの資料がその条件に合致するか否か判断できないからである。しかし, 今後の理論化のための手懸として資料の一部を示しておく。

方法: 資料1~6が資料となる。各資料の属する母集団の性質が特定できないため, ここでも各資料を個別に検討する。

結果と考察: 2つの孤独感が直線的な回帰関係にないことが予想されるために, 資料毎に孤独感の分布がほぼ3等分されるところで3分割し, 3×3のクロス表を作成して尤度比検定を試みた。従って, 各資料の3分割点には2~3点のずれがある。表8は例示として示した。全体に, 2つ

表8 2つの孤独感の“高”, “低”の関係
(資料5)

社会的孤立に基づく孤独感		低い	中間	高い
情緒的 孤立に 基づく 孤独感	低い	15 ¹⁾	19	2
		1.86 ²⁾	2.05*	-4.01***
	中間	9	11	8
		0.29	0.02	-0.31
	高い	9	13	24
		-2.03*	-1.97*	4.10***
合計		33	43	34

1) 人数

2) 調整後残差

*** $p < .01$

* $p < .05$

孤独感の構造, 集合的同一性, 人格的同一性および本当の自己の所在 (永田)

の孤独感の関係をみると, 一方の孤独感が高いとき他方の孤独感も高い, あるいは一方が低いとき他方も低いという直線的な関係にはない可能性が示唆されている。⁹⁾

総合的考察

いくつかの異なる資料によって, 筆者の仮説をもとに孤独感尺度の構成と, その妥当性に関係すると思われる外部基準との関係を検討した. すなわち, Weiss (1973, 1989), Shaver & Buhrmester (1983) の考察を手懸かりとして, 2種の孤独感の区分, またその2種の孤独感の発生は異なる機構にもとづくと同時に, 孤独感と総称する意義を人間関係, 集団・組織過程の道具的機能と自己完結的機能の発生機構に関する考察(永田, 1972, 1978, 1986) から捉えようとした.

結果は, 概ね基本的な仮説を支持する方法にあると考えられる. すなわち, 作成された尺度によって測定された孤独感が人間関係, 集団・組織過程への参加, さらに集合的同一性を中心とする同一性の確立と関連することが示されたと思われる.

人間関係, 集団・組織過程の道具性と自己完結性の実現の過程での相互の関係, 2つの孤独感の発生の因果的關係は今後の研究課題として残された.

注

- (1) この研究の一部は, 昭和 62, 63 年度文部省科学研究費補助金 (一般研究(C)62510069 研究代表者 永田良昭), 平成 4, 5 年度同補助金 (一般研究(C)04610067 研究代表者 永田良昭) を得て行なわれた.
- (2) 孤独感研究の特徴は, 本人自身が“孤独”であると思うことを基本的な定義とし, 孤独感測定尺度の妥当性は本人自身が“孤独”と思うかどうかとの連関に求める場合が多い (Russell, 1982). 同語反復に見える.
- (3) “emotion” は, 情動とするのが一般的であろう. しかし, ここでの孤独感は, 創造の原動力となる可能性のある孤独感 (de Jong-Gierveld & Raadschelders, 1982) と異なり

不快感など消極的な意味をもつ。語感としては情緒が適当であると思われる。本稿の意味での孤独感と不安, 情緒不安定などと区別が可能か否かはいずれ吟味される必要がある。上記の諸徴候と孤独感が関連することを示す研究も見出される。ここで不安等の神経症的傾向と異なることを主張するつもりはない。近似した現象とすれば, 神経症的傾向が人間関係に即して検討され得ることを示すものとなろう。

- (4) 人間関係, 集団過程の基本的な次元あるいは機能との対応という点からは, Shaver & Buhrmester (1983) は Cartwright & Zander (1968), Parsons & Bales (1955), リーダーシップに関する Halpin & Winer (1952), Misumi & Tasaki (1965) らの枠組もこれに対応するとしている。彼らが言及している諸研究は, 同じ著者のものでも, 関係する論考としては代表的なものと言ひ難い場合があるが, そこで引用された文献を引用した。また, Jennings (1950) のソシオグループとサイキグループ, Collins & Guetzkow (1964) の集団の処理すべき問題を外部刺激としての課題と集団を構成する人びとの関係の問題に区分する試み, 永田の研究 (1965) におけるリーダーシップの方向づけと集団維持機能もこれに相当すると考えられる。
- (5) 例えば, 社会的孤立に基づく孤独感, 要約すると, “社会的なつながりが無いといった感じの孤独感, 例えば共通の関心がない, 仕事の仲間がない” などの文章を提示し, “こうした孤独感をどの程度強く経験したことがあるか” を問うものである。
- (6) これらの問題に関する最近の実証研究は, 例えば飛田 (1989), 波多野 (1996) を参照。また, この仮説が包括するその他の現象に関する予測と関連する実証研究の紹介は永田 (1972, 1978, 1986, 1988) を参照。
- (7) Jennings (1950), Bales (1965), Burke (1967), Weissenberg & Kavanagh (1972) は人間関係, 集団・組織過程の道具性と自己完結性が独立の次元とは云えない可能性を示す現象を記載している。
- (8) この方法による自己概念への認知的不協和の耐性の測定については, 永田・坂口 (1967), 坂口・永田 (1967) において集団活動を媒介とする人格変容の機構, 過程を記述する指標として有効であることが示唆されている。
- (9) 資料 5 において相対的な意味ではあるが集合的同一性と人格的同一性が確立されている程度がともに高い群で, 社会的孤立に基づく孤独感と情緒的孤立に基づく孤独感の相関は .446 ($t_{(40)} = 3.613$ $p < .001$), 集合的同一性の確立の程度は相対的に高いが人格的同一性の確立の程度の低い群では, 2種の孤独感の相関は低い ($r = -.191$ $t_{(10)} = 0.616$) などが見出されている。しかし, この群別は相対的であり, 群間の関係が非連続的であるとの判断は困難である。

引用文献

- Bales, R.F. 1965 Task roles and social roles in problem-solving groups. In I.D. Steiner & M.Fishbein, (Eds.), *Current Studies in Social Psychology*. New York: Holt, Rinehart and Winston. 321-333.
- Bales, R.F. & Slater, P. 1955 Role differentiation in small decision-making groups. In T.Parsons, & R.F.Bales (Eds.), *Family, Socialization and Interaction Process*. Glencoe, Ill.: Free Press.259-306.
- Bowlby, J. 1969 *Attachment and Loss*. Vol.1: *Attachment*. New York:Basic Books.

孤独感の構造, 集会的同一性, 人格的同一性および本当の自己の所在 (永田)

- Burke, P.J. 1967 The development of task and social-emotional role differentiation. *Sociometry*, 30, 379-392.
- Cartwright, D.& Zander, A. 1968 *Group Dynamics: Research and Theory*. 3rd.ed. New York: Harper and Row.
- Clinton, M. & Anderson, L.R. 1999 Social and emotional loneliness: Gender differences and relationships with self-monitoring and perceived control. *Journal of Black Psychology*, 25, 61-77.
- Collins, B.E. & Guetzkow, H. 1964 *A Social Psychology of Group Processes for Decision-making*. New York: Wiley.
- de Jong-Gierveld, J. , & Raadschelders, J. 1982 Types of loneliness. In L.A. Peplau & D. Perlman, (Eds.) *Loneliness: A Sourcebook of Current Theory, Research and Therapy*. New York: Wiley Interscience. 105-119.
- Deutsch, M. 1975 Equity, equality and need: What determine which values will be used as the basis of distributive justice? *Journal of Social Issues*, 31, 137-149.
- ※ Halpin, A. & Winer, B. 1952 The leadership behavior of the airplane commander. Columbus: Ohio State University Research Foundation.
- 波多野 純 1996 共同作業場面における対人魅力と集団規範との関係—情緒性と道具性の影響—心理学研究, 67, 292-299.
- 飛田 操 1989 目標達成の困難度と対人魅力との関係について 心理学研究, 60, 69-75.
- 伊藤 勇 1985 日本型大衆社会と「自我」社会学研究, 48, 93-109.
- Jennings, H.H. 1950 *Leadership and Isolation*. 2nd ed. New York: Longmans, Green.
- ※ Jourard, S.M. 1971 *The Transparent Self*. 2nd ed. New York: Van Nostrand Reinhold.
- Kuhn, M.H. & McPartland, T.S. 1954 An empirical investigation of self-attitudes. *American Sociological Review*, 19, 68-76.
- Misumi, J. & Tasaki, T. 1965 A study on the effectiveness of supervisory patterns in a Japanese hierarchical organization. *Japanese Psychological Research*, 7, 151-162
- 永田良昭 1965 第一線・第二線監督者のリーダーシップの研究 I —リーダーシップ測定尺度作製の試み— 鉄道労働科学, 17, 75-82.
- 永田良昭 1972 組織におけるインフォーマルな集団の機能 豊原恒男・本明 寛・藤田 忠・三隅二不二編 組織行動の心理学 講座経営行動の心理学5 ダイアモンド社 83-130.
- 永田良昭 1978 グループ・パフォーマンス 末永俊郎編 集団行動 講座社会心理学 2 東京大学出版会 203-234.
- 永田良昭 1980 集団規範への同調および逸脱を規定する要因としての地位について 心理学研究, 51, 152-159.
- 永田良昭 1986 集団と個人 佐々木 薫・永田良昭編 集団行動の心理学 有斐閣

孤独感の構造, 集合同的一性, 人格的同一性および本当の自己の所在 (永田)

138-168.

- 永田良昭 1988 「知り合い」になる過程 安藤延男編 人間関係入門 ナカニシヤ出版 20-30.
- 永田良昭 1996 対人関係において能動的な役割を取得することに基づく自己生成的な認知的不協和について 学習院大学文学部研究年報, 第 43 輯, 157-183.
- 永田良昭 1998 血液型性格関連説およびこれに関連する通俗人間観への関心喚起の社会的心理的要因としての集合同的同一性および人格的同一性への要求 未公開
- 永田良昭・坂口順治 1967 T グループの効果測定を試み(II)—集団法による人間関係訓練の効果測定のための方法論的研究— 第 8 回日本社会心理学大会発表 年報社会心理学, 第 9 号, 300.
- Newcomb, T.M. 1953 An approach to the study of communicative acts. *Psychological Review*, 60, 393-404.
- 落合良行 1989 青年期における孤独感の構造 風間書房
- Parsons, T.&Bales,R.F.(Eds.) 1955 *Family, Socialization, and Interaction Process*. Glencoe: Ill.: Free Press.
- Rogers, C.R. 1959 A Theory of therapy, personality, and interpersonal relationships as developed in the client-centered framework. in S.Koch (Ed.), *Psychology: A Study of Science*. Vol.3. New York: McGraw-Hill. 184-256.
- Rubenstein, C.M.& Shaver, P. 1982 The experience of loneliness. In L.A. Peplau & D. Perlman, (Eds.), *Loneliness: A Sourcebook of Current Theory, Research and Therapy*. New York: John Wiley and Sons. 206-223.
- Russell, D. 1982 The measurement of loneliness. In L.A. Peplau & D. Perlman, (Eds.), *Loneliness: A Sourcebook of Current Theory, Research and Therapy*. New York: John Wiley & Sons. 81-104.
- Russell, D., Peplau, L.A. & Cutrona, Carolyn E. 1980 The revised UCLA loneliness scale: Concurrent and discriminant validity evidence. *Journal of Personality and Social Psychology*, 39, 472-480.
- Russell, D., Peplau, L.A. & Ferguson, M.L 1978 Developing a measure of loneliness. *Journal of Personality Assessment*, 42, 290-294.
- Russell, R., Cutrona, Carolyn E., Rose, Jayne, and Karen Yurko 1984 Social and emotional loneliness: An examination of Weiss's typology of loneliness. *Journal of Personality and Social Psychology*, 46, 1313-1321.
- 坂口順治・永田良昭 1967 T グループの効果測定を試み(I)—集団法による人間関係訓練の効果測定のための方法論的研究— 日本社会心理学会第 8 回大会発表 年報社会心理学, 9, 300.
- Shaver, P. & Buhrmester, D. 1983 Loneliness, sex-role orientation and group life: A social needs perspective. in P.B. Paulus (ed.) *Basic Group Processes*. New York:

孤独感の構造, 集合的同一性, 人格的同一性および本当の自己の所在 (永田)

Springer-Verlag, 259-288.

篠原弘章 1989 行動科学の BASIC 第5巻 ノンパラメトリック法 ナカニシヤ出版

Turner, R.H. 1976 The real self: From institution to impulse. *American Journal of Sociology*, 81, 989-1016.

Vaux, A. 1988 Social and emotional loneliness: The role of social and personal characteristics. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 14, 722-734.

Vincenzi, H.& F.Grabosky 1989 Measuring the emotional/ social aspects of loneliness and isolation. in Mohammadreza Hojat & Rick Crandall(Eds.) *Loneliness :Theory, Research, and Applications*. Newbury Park: Sage Pub. 257-270.

Weiss, R.S. 1973 *Loneliness : The Experience of Emotional and Social Isolation*. Cambridge, Mass. : Massachusetts Institute of Technology Press.

Weiss, R.S. 1989 Reflections on the present state of loneliness research. in Mohammadreza Hojat & Rick Crandall(Eds.) *Loneliness: Theory, Research, and Applications*. Newbury Park. Sage Pub. 1-16.

Weissenberg, P. & Kavanagh, M.J. 1972 The independence of initiating structure and consideration : A review of the evidence. *Personnel Psychology*, 25, 119-130.

※本稿の筆者は未見. 引用による.

(心理学科 教授)